

〔翻訳〕

## 女性について語る

張 愛玲

A Talk on Women

徐 青 記

XU Qing

中華人民共和国浙江理工大学外国語学院専任講師

*School of Foreign Languages Studies, Zhejiang Sci-Tech University*

*E-mail: Shanghaimode21@yahoo.co.jp*

【解題】この「女性について語る」というエッセイは、張愛玲 23 歳の折、1944 年 3 月の『天地』（月刊）という雑誌の第 6 期に初めて発表されたものである。その後、エッセイ集『流言』にも収録された。

張に関する研究論文で「女性について語る」というエッセイ自体について専門的な研究が行われた形跡はないが、かなりの論文においてこのエッセイは引用されている。その理由は実に単純である。張が描いた作品の主人公は、ほとんど女性であるからである。したがって、張作品を分析するには、このエッセイは実に重宝なのである。

しかし、私にとって、このエッセイの最もインパクトの強い部分は、人間が存在することに対する懐疑に他ならない。「子どもを産んで何の意味があるのか？ 死を生み出すだけではないのか？」……むろん、彼女はオニールの言葉を引用したにすぎないが、彼女の考えがそこに端的に示されている。かつて、十六歳の時、父親に半年軟禁されたこともあった。それが彼女の幼心にトラウマとなったのに違いないだろう。

発表した同じ雑誌の第 7 期と第 8 期の合併号にも「人を造る」というエッセイがある。そこでは、この観点が更に詳しく述べられている。「人を造ることは危険な仕事である」、「われわれの本性は人種を生みふやすこと、すなわち繁殖にある。たくさん生まれる。生まれてはまた、生まれる。そして、われわれは必ず死んで行く。しかし、われわれの種はこの大地にあまねく分布している。それは、どのような種なのか……憎しみの種である！」

彼女には二回の結婚歴がある。しかし、子どもには恵まれなかった。いずれにせよ、彼女の子どもに対する態度は、この二本エッセイの中に、すでにはっきり表現されている。(徐青記)

西洋人は陰険な女性を「猫」に例える。最近、もっぱら女性を罵る英語パンフレット『猫』を読んだ。その内容は、完全に人道を外れているわけではない。しかし、女性に関する意味深長な言葉が、散りばめられている。それはその集大成というわけではないのだが、そこにあるような言葉を探して集めるのは容易ではない。そのうちのいくつかを拾って訳してみよう。読者には読後に必ず感想があり、ある人は怒り、ある人は笑い、またある人は痛快にも感じるだろう。自分は公平でバランス感覚のあるという男性は、「良心に従って論じるべきである」、あるいは「少し過激だ」、あるいは「それはそうではあるが、ただ少数の女性に適用しうるだけである。何であれ、誤りがあればこれを改め、でなければいつそう努力すべきである。人の忠告は謙虚に聞き入れるものだ」等々。つまり、このテーマは、いつも話題を呼ぶのである。私自身もその例外ではない。まず、『猫』原文を読んでから議論することしよう。

『猫』の作者は匿名である。その匿名作者は序文の中で、厳かで重々しく、まず次のように声明する。「ここで取り上げる話は、あなたのことなのではなく、愛する読者——もしあなたが男性であれば、あなたの妻、姉妹、娘、祖母、あるいは嫁の母などを指しているわけでもない」。

作者は何回も弁明する。この書を書く目的は、女性の前で損をしたので、書いてうつぶんを晴らすものではないのだが、読後には、少いうつぶんを晴らす作用があることも作者は認める。なぜなら、「妻と喧嘩したばかりの男性は、ベッドに行く前にこの本を読めば慰安されるだろう」からである。

作者曰く、「女性は、物質面ではあまりにも合理化しすぎており、精神面では少し足りない。それは想定内のことであり、厳しすぎる要求をしてはいけない」。

男性に真実の愛情がわく時には、その愛は女性の愛よりも偉大である。しかし、別の側面から見ると、女性は人を憎む時、男性よりも執念深い。

女性と犬とで異なるところは、犬は女性ほど甘やかされてはおらず、宝石を身につけることがないことである。そして、天に感謝しよう！犬は話せないのである。

個々の男性のお金は、結局のところ必ず特定の女性に使ってしまっても何もなくってしまう。

男性は、もっとも下等のバーの女とふざけても、身分を失うことはない。上流階級の女性は、郵便配達員に遠くからキスを投げかけてもいけない！したがって、ここから次のような推断が可能である。男性は女性とは異なっており、腰を屈めすぎでも大丈夫。なぜならば、男性は改めて腰を伸ばすことも難しくないだろうからである。

一般的には、女性の生活は男性の生活ほど多種多様の興奮剤を必要としない。したがって、ある男性が、公務の余暇に常軌を逸することをしたとしても、彼らの疲れ、悩み、未完成の志を調整することは、許されるべきであろう。

大多数の女性にとって、「愛」は、「愛を受ける」という意味に他ならない。

男性は、女性を愛することが好きであるとはいえ、時には愛されることも欲するだろう。

もし、あなたがある女性を助けると約束したのなら、どんな事でも彼女はあなたに代わって行うであろう。ただもし、あなたがすでに彼女を助けてしまったのなら、彼女は慌ててあなたを助けたりはしない。だから、あなたは時々刻々異なる援助を女性に約束すべきなのである。そうすれば、あなたには多少なりとも報いが返ってくるのであり、少しばかり利点を得ることになる。なぜなら、女性が恩に報いる仕方は一種しかないからである。つまり、予め恩返ししておくという仕方である。

男性から見れば、ある女性の衣装は美しく素晴らしいものであるかもしれない。しかし、別の女性にとって、それはせいぜい「1ヤードで1シリング3ペンス」のものであるので、美しいとはいえない。

時は金である。だから、女性はたいてい鏡の前で時間を費やす。たくさんの金をブティックに費やさなければならない。

もし、あなたが女性をからかわないと、あなたは男性ではないと彼女は言うであろう。ただもし、あなたが彼女をからかうと、あなたは上等な人間ではないと彼女に言われるのである。

男性が、その勝利を誇る時、女性は自分の価値の下がることを自慢する。敵が攻めてくる原因は、往々にしてすべて彼女自身の招いたものである。

女性は善良な男性を好きではない。しかし、彼女たちは、自分を感化院だと考えている。嫁ぐと、夫はすぐに聖人になるのである。

男性だけが、口を開いて求婚する権利を持っている。この制度が一日でも存在していなければ、婚姻は一日として公平に成立しえない。女性は必ず、はじめは「彼の要求を許した」と言い出すのである。したがって、喧嘩の時に有利な位置を占めることになる。そのため女性は、男性が求婚すべきであるとあくまで主張する。

大多数の女性にとっては、「してはいけないことをしてから」、ようやく快樂になる。婚姻はまるで、まだ「正しくはないもの」になっただけではないようだ。

女性たちは往々にしてこの点を忘れてしまう。彼女らが受けたすべての教育は、いうまでもなく、彼女らに強い意志を教え、外界の誘惑に抵抗することにほかならない。しかし、彼女たちは一生のエネルギーを消耗して外界への誘惑を喰す。

現代の婚姻は、女性によって発明された一種の保険である。

もし、女性が口からでまかせに物語をつくりあげた後、印税を引き出せるのならば、すべての女性は全員が金を賭けることになる。

あなたが突然女性にひとつの質問をした時、彼女の最初の答えはたぶん正史であり、次の答えは間違いなく小説である。

女性は往々にして、夫とギリギリまで議論し、そして必ず彼を論破する。しかし、第三者に向かっては、至理名言のように彼の話を引用する。哀れなる夫……。

女性と女性とが友達になることは、男性と男性とが友達になる場合のように早くはない。彼女たちには、人に隠そうとすることがたくさんあるからだ。

女性たちは本当に幸運である。外科医は彼女たちの良心を解剖することはできない。

ただ単に男性による女性への待遇を根拠として、女性は男性を評価する。女性はこのようにいうのである。「あの人が犯人だなんて私には信じられない——彼は一度も私を殺そうとしたことがないのだから！」

男性は、ことを間違うが、女性は、遠回りして計画し、ことを間違う。

女性は未来をあまり考えようとしない。そして、同時にできるだけ彼女たちの過去を忘れようとする。彼女たちが何を考えているのかは神のみぞ知る。

女性は、経済的に節約しようとする時、どのように「必要」な支出であっても、節約することができる。実に驚くべきことである！

もし、ある女性が、ある秘密をあなたに伝えたなら、絶対に、別の女性にそれを漏らしてはならない。きっと、他の女性の誰かが、もうすでに彼女に伝えているはずであるからだ。

あなたが、ある女性のために何かを為そうとしていて、それがいかなることであったとしても、彼女はそれがあたりまえだと言い、彼女が感謝の意を示すことはない。逆に、あなたが、いかなる小さいことであったとしても、それを為すのを忘れたのなら、彼女はあなたを罵るのである。……家庭は慈善機関ではない。

大多数の女性は、話をする前に何にも考えない。男性は考えて、次第に何にも言わなくなる！

本を読む時、女性は絶対二回目は読まない。なぜならば、「その内容を知った」からである。このような女性はけっしてよい妻にはなれない。もし、彼女が、ただ新鮮さだけを求め、風格と韻致に気を配らないなら、時間が少し経ち夫の性格がよくわかると、彼の弱点や性格が捻くれている所について、彼女は彼の沈みがちで無味であるところを嫌がり、もう彼を愛さなくなる。

あなたの彼女は空中楼阁を建設している。もし、それが存在していないのだとすれば、それはすべてあなたの責任である。

女性に「私が間違っていた」と言わせるのは、男性に一揃いの早口言葉を言わせることより、はるかに難しい。

あなたが自分の妻を疑えば、彼女はあなたを騙す。あなたが自分の妻を疑わなければ、彼女はあなたを疑う。

あらゆる「女性はこうだあだ」というお話は冗談話であるので、ただ単におもしろお

かしきだけを意図するばかりでない。意味の正確さにも駆け引きが必要である。なぜなら、各人各人様の性格があるからである。一括して論ずるなどということはどうしてできるのか？ とはいえ、比較的女性は一括して論ずることができる。なぜなら、天下の人には、風俗、習慣、職業、環境は異なるが、大半の女性は、家にいて家事をし、子どもの面倒を見ているからである。もし、伝統的な生活スタイルが種類しかないならば、個々人の習性が違うにしても限界がある。したがって、あいまいに、「女性はこうだあだ」というのは、「男性がこうだあだ」というより以上に、把握可能である。

私の学校には非公式な弁論会があった。いったん男性と女性の問題に関わると、みんな元のテーマが何であったのかを忘れてしまい、ただその一点に集中して、多くの人が方々から口を出した。うれしければ笑い、怒ればののしる、といった具合に、その空気は異常に情熱的であった。ある女史は老新党の口ぶりで正々堂々としたさまで、男性が女性に対していかに不公平であるかを話した。女性を虐める、つまり、この軟弱で壊れやすい存在、感情の豊かな動物、女性の感情を利用して彼女を拘禁する、強迫されて遊びものとなり、生存競争の上で、女性が男性の下にいるのは、機会不均等である等々……男性女性の論戦においては、女性は永遠にこのようなことを主張するのである。私は我慢できず反駁したかった。ただ単にここに気をてらって記したいからというわけではなく、そういった言説は本当に聞き飽きたのである。1930年代頃の女学生たちがみんな一冊ごとに手にした雑誌『玲瓏』では、一方では映画女優の美容の秘訣を伝え、一方では美しくなった女性はいかに男性からの進攻を防犯するかについて書かれていた。なぜなら、男性は皆「心に良いことを考えてはいない」人たちだからである。恋愛は無論危険である。たとえ結婚するにしても、危険である。結婚は恋愛の墓場だからである。

女性たちのこのような話は、われわれは聞き慣れているので、詳しく説明することができる。われわれは男性の話もたくさん聞いた。いずれも女性が極悪非道で許すことのできない、重大な犯罪行為を、書きつくせない多くの罪悪を犯していると罵るのである。ただ、民族生存のことを考えて、女性を全部殺してはいけないとも言うわけである。

両方ともに、それぞれが自分の言い分を主張する。表面的には、公は公に理があり、婆は婆に理があるかも知れない。女性は、的確に言えば、狭量であり、あまのじゃく、偽者、視線は豆のように小さく、男性を誘惑する妖精（一般のまじめな女性は奔放な女性を嫌うが、実は、奔放な女性を演じる機会があれば、みんな腕を振るいたくて勇み立ち、やってみたくてうずうずしている）であり、聡明な女性がこれらの評価に対して弁護することはない。しかし、元はといえば、罪は全部男性にある。上古の時代、女性は体力が男性より弱いので、男性の拳骨の下で屈服した。何千年来、終始支配を受けている。環境適応するために、いわゆる「めかけ婦人の道」を養成したのである。女性の悪い根性は男性の手によって作られてきたのに他ならない。男性は何を恨むべきなのか。

女性の欠点は全部環境で作られてきた。しかし、近代になって、男性と同じように高等教育を受けた女性は、なぜ往々にして、人を失望させたのか。彼女の祖母のように、疑り深く、ねじけているからなのであろうか？ 当然、何千年の因習は、一日一晩できれいさっぱりと改めることはできない。もう少し時間が必要である。

だが、すべての責任を全部男性のせいにするのは徹底的な答えであるとはいえない。まったく責任を持たない危険がある。「無責任」も男性たちがよく女性に付けた形容詞である。

『猫』の作者は言う。「かつて、ある誇り高き教授は私に、なぜ、私が女性を嚴重に扱わないのかについて、一ダースの理由を教えてくれた。この件は、ずっと私を悩ませている。なぜならば、彼女たちはいつも自らを嚴重に見るからである。彼女たちは自身のことについて甘く、責任のない扱いをされることをもっとも嫌がるのである」。もし、本当にこの教授が言うように、彼女たちを嚴重に扱うべきではないが、彼女たち自身も「甘い、責任のない」扱いをされることを断じて嫌がる」のであれば、どうすればよいだろうか？

「彼女たちは、嚴重に扱われたいのであるが、彼女たちが何か重大な間違いをおかした時には、『甘い、ただ単に無責任なこどもである』といった具合に扱われたいのである」。

当初、女性が父系宗法社会に征服され奴隷になった原因は、体力が男性より劣っていたからであった。だが、男性の体力は山犬、狼、虎、豹には及ばない。なぜ、競争して天に選ばれる過程で、動物は人に屈服したのか？ 明らかに体力の問題だけではない。

有名な小説家オルダス・ハクスリー (Aldous Leonard Huxley) の『恋愛対位法』(Point Counter Point, 1928年)には、次のように記されている。「いかなる人間も、いかなる出来事に出会う」。『恋愛対位法』中の若い妻マリアは、殴られることを招く、生まれつきかわいそうな人間である。彼女の夫は、元々相当に大人しく善良な人間であるが、彼女の期待に背き、ある社交界の華と関係を持った。マリアはようやく、悲しさのあまり天に向かって叫び、頭を地に擦り付けるような、悲しむ人となった。

確かに、社会の進展は大きく不思議であり、一人でコントロールできるものではない。当事者でも訳の分からないことが多い。しかし、ある段階にまで遡及すると、ある主動的な成分がその中であって、それを除くことはできない。たとえば、現在の世界の趨勢のように、人類は次第に競争の激しい機械化商業文明へ進化し、相互に戦わなければならない局面となった。駆けめぐり、泣き喚いたりして、「戦わない、戦ってはいけない」と言っても、恐れ惑って一つ一つ引張られてしまう。本当に仕方がないことである。だが、それは人類自身のせいなのではないか。

男性が世界を統治するとすべてがめちゃくちゃになるので、その位置を女性に譲れば、きっと目に触れ耳にするものすべてが新しく変わる、という人がいる。これは、まるで急病で慌てて医者を探し、診てもらおうようなもののように聞こえる。もし、君主政治であったなら、則天武后はきっと英明な君主であり、唐太宗も英明な君主であるだろう。よい皇

帝であれば、男女に拘ることなく、天下はともに平安である。君主政治の病気の根源は、あまりにも良い皇帝を得がたいところにある。民主政治の場合、大多数の女性の自治能力水準は、男性よりもさらに低いので、まるで女中同士の喧嘩のような国際間の紛争が発生した場合、その当事者が正真正銘の女性に換わっていると、いったいどういうことになってしまうのか、想像するだけで堪え難いほどである。

女性が国を治めて天下を平和にするのは、まるで「芝居をやる術がないので菩薩に頼む」、かのようなものである。そのようなでたらめな助言には、科学的根拠もある。かつて、今回の世界大戦が、もし、われわれの文明をぶち壊し復元不可能な状況に追い詰められたならば、その次の新生文化は、黒人のものとなるだろう、と言った人がいた。なぜなら、黄色人種、白色人種はすでにそれぞれに実績を残しているからである。黒人だけが無邪気であり、精力を減らしてはいない。未来の大時代では、おそらく彼らが主役になる番である。このようなことを言うのは、なにも、人を驚かしたいわけではない。高度な文明は、高度な訓練と抑圧により、たしかに間違いなくその活力を切り削り破壊することができる。女性はよく、野蛮で、原始的であると責められる。人類は、鳥類と獣類を手なずけたのだが、徹底して女性を手なずけることはできないでいるだけなのだ。何千年以来、終始、女性は、教育感化の外にいる。彼女たちは、もしかしたら、そこで活力を養われていて、ゆっくりと大挙に取り掛かろうとしているかもしれない。

女権社会には、よいところが一つある。それは、女性が男性よりも結婚相手を選ぶ常識をもっているということである。この点については、厳密に学問的に深められているわけではないが、人類前途の喜びと憂いに大きな関係があるといえる。男性は妻を選ぶ際、単純に顔で決めてしまう。顔や体格は優生学上考慮されなくてはならないからである。女性は夫を選ぶ際、顔にはあまり拘らず、男性ほど偏ってはいない。知恵、健康、言葉遣い、態度、風格、自給力などの項目も同時に考慮するのである。もはや、顔は二の次となっている。現代社会の問題のすべては、男性があまりにもよき妻を選ぶことができないために起こるのだ、という人もいる。妻の選択に失敗すれば、子どもは不十分な家庭教育しか受けることができず、子孫の状況がますます悪くなるからである。これは少し大袈裟に言っているのかもしれない。だが、この点については、われわれも承認しなければならない。すべての婚姻が女性主導で行われるならば、われわれは人並み外れた優れた超人民族を誕生させることができる。

「超人」という用語は、ニーチェがそれを提示して以来、頻繁に引用される。ニーチェ以前では、古代の寓言の中にも同類型の理想像を見出すことができる。奇妙なのは、われわれの想像中の「超人」がいつも男性であることである。なぜか？「超人」文明はわれわれの文明よりもさらに進歩的なものであろう。われわれの文明は男性の文明であり、「超人」はさらなる純粋な理想の結晶である。しかし、「超人的女性」は、現実には求めえないわけで

はない。すべての文化の諸段階において、女性はやはり女性なのである。男性はある方面に偏って発展しているが、女性はもっとも普通で、土地、生まれること、老いること、病むこと、死ぬこと（生老病死）、飲食、繁殖など基本的で、四季の循環を代表する。女性は、人類が太空へ飛ぶ靈智で浮かつかないように根柱に縛りつけられているのである。

たとえば、ここに今われわれは完璧な女性を見出すことができる。完璧な男性は希有である。なぜなら、われわれは、根本的にどのような男性が完璧な人間であるかは知らないからである。功利主義者たちにはかれらの理想がある。老子と荘子の信徒たちにもかれらの理想がある。ナチス黨員たちにも彼らの理想がある。彼らには各自不足がある。われわれが「完璧な男性」への希望を持ち過ぎているが故である。

女性の活動範囲には限界があるので、完璧な女性は完璧な男性よりさらに完璧である。同時に、往々にして悪い女性は悪い男性よりもさらに徹底的に悪いものである。それが現実である。商業道徳はないが、私生活は一分のすきもない、といった一部の商売人は存在する。反対に、女性に対して良心のない男性は、その他の面では真面目に仕事に尽くすことができる。しかし、悪どい女性のその悪は、あらゆる間隙をねらう。

「超人」は男性的である。神には女性的な成分がある。「超人」と「神」とは異なる。「超人」は進取である。種の生存の目標である。神は、広大な同情、慈悲、了解をもって安らかに眠る。多くの知識人同様、私もいわゆる宗教を信じようとするが、信じることはできない。もし、ある日、私が信仰を獲得したとすれば、多分信じるのはオニール<sup>1</sup>の『偉大なる神ブラウン』<sup>2</sup>という劇の中の地母であろう。

『偉大なる神ブラウン』は、私の知る限り最も人を感動させる劇である。読みまた読む。第三、四回目の読書時には、また悲しみが込み上げ、涙をこぼした。オニールが印象派的な筆遣いで描いた「地母」は売春婦である。「強壯で、静かで、セクシーな、20歳ぐらいの黄色い髪的女性で、皮膚の光沢は健康的で、乳房は豊かで、寛骨は広い。彼女の動作はゆったりとしていて、着実で、物憂げで、まるで一頭の野獣のようである。彼女の大きな目は、まるで夢を見ているように深く、生まれつき騒ぎ立てることを反映している。彼女はガムを噛みながら、まるで聖なる牛のように、時間を忘却した。彼女自身にはとこしえに生きる目的がある。」

彼女の話し方は粗野であると同時に情熱的でもある。「私はあなたたちを悲しく思う。あなたたちは犬を母としている。私は赤裸々になって街を走りまわりたい。あなたたちをまとめて愛す。死ぬほどあなたたちを愛す。私はまるであなたたちに新麻酔剤を持ってきたかのように、あなたたちは永遠にすべてを忘れさせた。(歪んで微笑み)しかし、彼らには私が見えない。まるで、彼ら自身も互いが見えないように。彼らには私の助けがなくても

1 ユージン・グラッドストーン・オニール (Eugene O'Neill, 1888～1953)。

2 『偉大なる神ブラウン』 *The Great God Brown* (1926年初演)。



引き続き前に進み、そして死んでいく。」

人が死ねば、地に埋葬される。「あなたが眠ったなら、私は布団を掛けてあげる」と「地母」は死にかけている人を慰安するのである。

人は、生きている時には仮面を付けなければならない。彼女は死にかけている人の仮面を外して、「あなたは、仮面をつけて眠ることはできない。眠るなら、自分ひとりでいかなければならない」と言う。

ここで、ある段落の科白を抄訳しておこう。

偉大なる神ブラウン：(しっかりと彼女にもたれ、感激しつつ) 地は暖かい。

地母：(慰めながら、両目で前を見つめ、まるでひとつの偶像のように) シー！ シー！（彼に声を出させないように）眠りなさい。

偉大なる神ブラウン：はい、母上。……私が目覚めた時には？

地母：太陽がまた昇ります。

偉大なる神ブラウン：生きている人間と死んだ人間とを審判する！（恐れながら）私には公平な審判など要らない。私は愛がほしいのです。

地母：ただ愛だけを。

偉大なる神ブラウン：ありがとう。母上。“

人が亡くなると、地母は自らに、「子どもを産んで何の意味があるのだろうか？ 死を生み出すだけなのではないか？」、と言うのである。

彼女はまた、「春は必ずまた戻ってくる。いのちと共にやって来くる！ 必ず来る！ いつも、いつも、永遠に又やって来る！ —また春！ —またいのち！ —夏、秋、死、また平和！（痛切な憂え、悲しみ）でも、いつも、いつも、いつもまた恋愛と妊娠と生産と苦痛が繰り返され、また春が、耐えられぬいのちのコップについて来た、(痛切な喜びを換えた)、光栄で燃えている生命の王冠とともに！（彼女は立ったまま、まるで大地の偶像のように、目は広々と果てなきように乾坤を見つめている）。」

これは女神である。「まるで鳥のように軽快に飛び舞い、龍のように泳ぐさま」の洛神は、ただ単に昔の服を着た美女である。世俗の者たちが供える観音は、ただ単に素足に服を着た美女である。半分裸体で身長が高く、太っているギリシャの石像は、ただの女性運動家にすぎない。金髪の聖母は、ただ単にスマートな乳母である。みんなの前で千年余り乳を飲ませてきたのである。

さらに、言えば、宗教論争と関わり、危険な渦に巻き込まれることとなる。男女論争と同様に、激しいが、あまりおもしろくはない。まあ、早めに止めておこう。

たとえば、女性はたくさんの欠点があったにしても、その精神には「地母」の芽がある。可愛い女性は本当に可愛い。ある程度、その可愛い質と風韻は、人工的に育てられるものである。世界各国各種の異なる淑女教育は、全部これを目指としている。往々にして元の

意味を歪曲しているではあるけれども、この『猫』という本の中の夫人、お嬢様たちが引き起こしたことも、また許容範囲内にある。

女性が人を喜ばす方法はたくさんある。ただ単に、彼女の身体を目標とする人は、たくさん貴重な生活の趣を失ってしまったのである。

美しい身体をもって人を喜ばせることは、この世の中の最も古い職業である。そして、極めて普遍的な婦人の職業でもある。生きるために結婚するすべての女性は、全部この項に入れられる。これも、明言を避ける必要はないだろう。美しい身体があれば、その身体をもって人を喜ばせ、美しい思想があれば、その思想をもって人を喜ばす。その分別は、それほど大きくない。